

原著論文

ロジックモデルを規準とした測定指標による コミュニティ介入のアセスメント

地域リーダーの評定に基づく介入構造の検証

安田節之＊

＊ 西武文理大学

臨床・コミュニティ心理学の領域では、コミュニティ介入による援助のあり方が模索されている。しかし、コミュニティ介入における介入理論やサービス提供方法には把握しにくい部分が多いため、介入のプロセスや効果の検証が困難となる。本研究の目的は、ロジックモデルを規準としたアセスメントを行い、コミュニティ介入の機能や構造を効果的・効率的に把握する方法を検討することであった。地域の健康増進プログラムのリーダー（ $N=39$ ）に対して質問紙調査を実施したところ、ロジックモデルの各要因（インプット・アクティビティ・アウトプット・アウトカム）は、一定の信頼性のもと査定が可能であることが明らかになった。また、一般化可能性理論に基づいた分析の結果、ロジックモデルの各要因を規準とした信頼性の高いコミュニティ介入のアセスメントには、5項目から10項目の指標が必要であることも明らかになった。

キーワード：コミュニティ介入、ロジックモデル、一般化可能性理論、プログラム評価

Japanese Journal of Clinical Psychology, 2015, Vol.15 No.1 ; 99-108

受理日—2014年7月7日

I 問題と目的

コミュニティ介入 (community intervention) は、コミュニティにおける実践や支援を目的とした介入であり、これまで、コミュニティ・アプローチや臨床心理地域援助はもとより、コミュニティ・デザイン（例：まちづくり）やコミュニティ・ビジネス（例：NPO活動）といった領域において、さまざまな介入理論や介入方法が検討されてきた。なかでもコミュニティ心理学領域においては、コミュニティ感覚 (sense of community) やエンパワメント (empowerment) に代表される組織やコミュニティの文脈とコミュニティ介入のプロセスとの関係性を検討した多くの研究蓄積がある（例：Hughey, Peterson, Lowe, & Oprescu, 2008 ; Speer & Hughey, 1995）。

一方、何らかの問題解決や目標達成を目的に人が中心となって行う実践的介入を意味し、介入の背景や必要資源から介入効果に至るまでの一連の流れを体系的に捉えたプログラムという観点から、コミュニティ介入のメカニズムを捉えた研究は未だ数少ない。コミュニティ介入は、人と人や地域とのつながりといったさ

まざまな関係性に基づいた社会的な文脈（コンテクスト）の影響を強く受けるコミュニティが介入対象であるため、介入機能の査定や効果評価に関する理論や方法論が定着しづらい。したがって、コミュニティ介入の構造化に有用な枠組みを用い、体系的な査定方法を検討するメリットは大きい。

以上の点を鑑み本研究では、プログラム評価で用いられるロジックモデルを規準 (criteria) としたコミュニティ介入のアセスメント方法を、地域での健康増進プログラムを例として検討することを目的とする。

II コミュニティ介入の構造

コミュニティ介入は、地域での実践や援助のための有効的な手段として古くから注目されてきた（例：Bloom, 1980 ; Cohen, 1973 ; Gesten & Jason, 1987 ; Iscoe & Harris, 1984 ; Reppucci, Woolard, & Fried, 1999）。特に、組織におけるコミュニティ感覚やエンパワメントがどのように介入の効果の促進・抑制要因となるか否かに、実証研究の焦点が当てられてきた。例えば、米国では、コミュニティにおける介入活動のメカニズムを考察するための Community Organi-

zation Sense of Community 尺度 (COSOC; Hughey, Speer, & Peterson, 1999) が開発され、組織において醸成されるコミュニティ感覚が「組織との関係性 (relationship to the organization)」「媒介役としての組織 (organization as mediator)」「地域との繋がり (bond to the community)」という3要因で概念化できることが明らかにされている。

また、日米間の比較研究の一環として日本語版 COSOC 尺度も開発され (Yasuda, Hughey, Peterson, Saito, & Kubo, 2007a), 日本の高齢者が中心となった地域活動組織に関するデータ分析が行われた。その結果、当該組織におけるコミュニティ感覚についても、上述の3要因での説明が可能であることが明らかになった。さらに「組織との関係性」および「媒介役としての組織」の値が高ければ高いほど、組織におけるエンパワメント要因でもある「社会・政治的コントロール (sociopolitical control)」が高くなり、その反面、「地域との繋がり」が低ければ「コミュニティへの関与 (community involvement)」も低くなるという結果が得られた (Yasuda, Hughey, Peterson, Saito, & Kubo, 2007b)。

以上に挙げた組織内外の特性は、コミュニティの文脈に左右されるため、介入プロセスや期待される効果も当然、文脈からの影響を受けることになる。これは、文脈の影響を抜きにしてコミュニティ介入の本質を捉えることが、事実上不可能であることを意味する。したがって、コミュニティ介入の効果は“コミュニティの文脈による”といった検証結果しか導き出せないことがほとんどである。このような点もコミュニティ介入の研究が難しい理由と言える。

2 コミュニティ介入のアカウンタビリティ向上

一方、臨床心理サービスなどのヒューマンサービス領域では、介入効果のエビデンス構築やアカウンタビリティ向上がこれまで以上に重要視されている (例: 安田, 2013; 安田・渡辺, 2008)。そのようななか、プログラムのキャパシティ (実行可能性) の開発やサステナビリティ (持続可能性・自立発展性) のアセスメントを通じて、コミュニティ介入を体系化・可視化する試みが盛んになってきている。

例えば、営利・非営利組織のコンサルティングを行うマッキンゼーは、地域の非営利組織のキャパシティ開発 (capacity development) に関するアセス

メントツールとして、①抱負 (aspirations: ゴールやミッションの確立)、②戦略 (strategy: ターゲットの見極めやプログラム開発)、③組織スキル (organizational skills: 業績マネジメントや組織での関係性構築)、④人的資源 (human resources: スタッフやボランティア)、⑤システムと運営基盤 (systems and infrastructure: 計画や意思決定システム)、⑥組織構造 (organizational structure: ガバナンスや組織デザイン)、⑦組織文化 (culture: 共通価値や多様性の存在) の計7領域からなる The McKinsey Capacity Assessment Grid を開発し、プログラムの実施者や運営者といったステークホルダーの立場からの評価による自己評価・フィードバックの仕組みを提唱している (McKinsey & Company for Venture Philanthropy Partners, 2001)。

また地域の任意団体や法人格を持つ NPO などからなる連合組織の総称であるコミュニティ・コーリション (community coalition) に関する理論・実証研究では、組織内外の機能に関する理論モデルが構築された上で (Cramer, Atwood, & Stoner, 2006a), ①社会的なビジョン (social vision)、②効率的な実践 (efficient practices)、③知識・訓練 (knowledge and training)、④組織における関係性 (relationships)、⑤主体的参加 (participation)、⑥活動 (activities)、⑦資源 (resources) の7指標 (計30項目) からなるアセスメントツールが開発され、ステークホルダーの評価による介入構造や効果の検討が行われている (Cramer, Atwood, & Stoner, 2006b)。

さらに、The Program Sustainability Index (PSI) を用いた研究では、①リーダーの有能性 (leadership competence)、②効果的な協働 (effective collaboration)、③コミュニティの理解 (understanding the community)、④結果の論証 (demonstrating program results)、⑤戦略的な資金提供 (strategic funding)、⑥スタッフの参加と融合 (staff involvement and integration)、⑦プログラムの責務・信頼度 (program responsibility) の7つの側面 (計53項目) からコミュニティ介入の持続可能性・自立発展性 (sustainability) のアセスメントが行われた (Mancini & Marek, 2004)。

このようなアセスメントツールは他にも開発されているが、内容や査定方法が多様多様であり (例: Granner & Sharpe, 2004)、また、活用される領域も

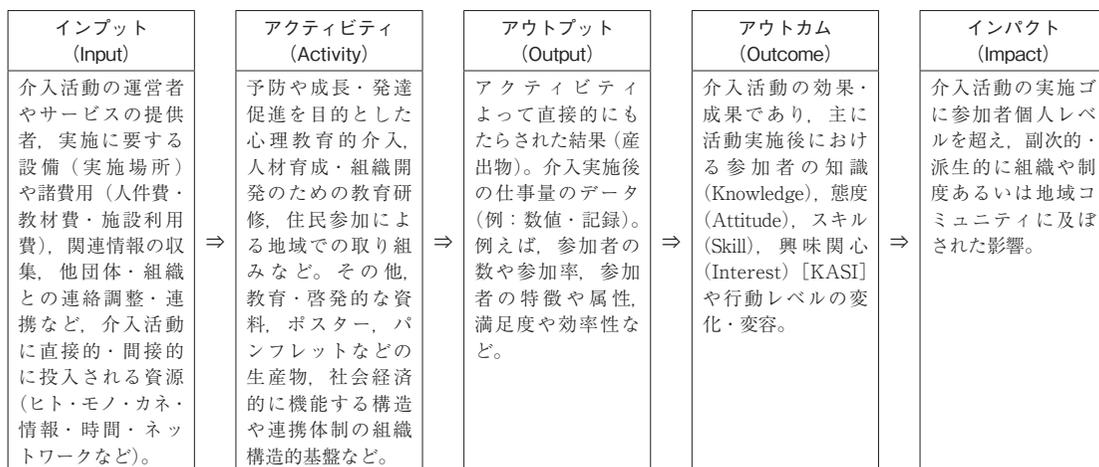


図1 ロジックモデルの基本構造（W.K. Kellogg Foundation, 2006）

経営学や国際開発から教育学に至るまで多岐にわたっている。さらに、信頼性・妥当性等の検討がなされているものからそうでないものまで、いわば玉石混交であるのが実情である。

コミュニティ介入は、介入の目的や文脈ごとに異なるアプローチがとられるため、介入の構造やプロセスを包括的に捉えることに困難が伴うことは、既述の通りである。したがって、コミュニティ介入を有機的かつ包括的に捉えることが可能な枠組みが有用となるのである。そのような枠組みの1つに、ロジックモデル（logic model）がある。

3 ロジックモデル

ロジックモデルは、プログラムのアカウントビリティ向上を目的として開発されたもので、プログラムの介入の内容や機能を一定のルールに従ってモデル化したものである（W.K. Kellogg Foundation, 2006）。具体的にロジックモデルでは、プログラムをインプット（投入資源：input）、アクティビティ（活動：activity）、アウトプット（結果：output）、アウトカム（成果：outcome）、インパクト（影響：impact）に分けて考え、各要因および要因間に存在する関係性が図1で示された関連図、つまり“if-then”の因果関係の連鎖によって構造化される。

よって、もし投入資源（インプット）があれば（if）活動（アクティビティ）が実施され（then）、活動が実施されれば（if）結果（アウトプット）が表れる（then）。そして、望ましい結果が得られれば（if）そ

れが成果（アウトカム）となり（then）、最終的に、成果が生まれれば（if）プログラムを超えた派生的な影響（インパクト）につながる（then）、というように図式化される。ロジックモデルの説明は安田（2014）などに詳しいため、ここでは、各要因の要約のみを図1に示した。

一般に、ロジックモデルは、開発段階の介入活動あるいはすでに存在する活動の可視化に適している（例：安田・武田，2010）。そのため、介入活動を可視化するツールとして用いられることが多い。例えば、本間（2012）はCBO（community-based organization）によるHIV予防活動を展開するなかで、高リスク群へのアウトリーチによるコミュニティ介入をロジックモデルによって詳細に可視化したプロセスの検討を行っている。

また佐藤（2010）は、社会福祉協議会の活動を体系的に捉えるためにロジックモデルを適用し、プログラム評価の実施に向けた可視化を行った。さらに安田（2013）も、市民と自治体との協働で実施される健康増進プログラムの介入プロセスをロジックモデルに沿った形で可視化している。ロジックモデルの構成要因は至ってシンプルのため汎用性が高く、さまざまな介入活動のモデリングに利用することが可能である（例：Renger, 2002）。

プログラムを通じた介入活動の可視化に多く用いられるロジックモデルであるが、各要因（インプット、アクティビティ、アウトプット、インパクト）を構成概念とみなし、測定を行うという立場をとること

も可能である。つまり、コミュニティ介入の構造や機能を体系的に捉えるための規準としてロジックモデルを適用する、という視座である。すると、ロジックモデルという照合枠を用いたコミュニティ介入の構造化が可能となる。そして、プログラムを熟知する介入実施者の視点、つまり地域リーダーによる“知覚されたプロセス (perceived process)”や“知覚されたアウトカム (perceived outcome)”に基づいたアセスメントは、簡易的ながらも体系的なコミュニティ介入の自己評価・フィードバックシステムを構築する上で、有用な情報を提供できる可能性が高い。そこで本研究では、地域コミュニティで実施される健康増進プログラムを一例として、ロジックモデルを規準としたコミュニティ介入のアセスメント方法を検討する。

II 方法

1 調査対象と調査手続き

2013年2月にS県S市の大学において実施された健康増進プログラムのリーダー研修への参加者(N=39)を対象に、質問紙調査を実施した(安田, 2014)。この健康増進プログラムは地域住民を対象とし、レクリエーションや体操を通して自身の健康づくりと地域での仲間づくりを推進することを目的としたプログラムである。本プログラムは、自治体が推奨する体操を定期的に地域住民に対して行い、個人個人の心身の健康を維持・促進しつつ、仲間づくりや地域づくりといった観点から地域全体の健康増進と介護予防に役立てようとする取り組みを基盤とするものである。2002年に設立された本プログラムの事務局は自治体の高齢者支援課にあり、ここ数年は、市内の公民館等の15カ所で毎月1回実施されている。

本調査の対象であるリーダー研修への参加者は、この健康増進プログラムにおいて指導的な立場にある人々であり、リーダー研修は毎年1回(1日2部構成)で開催されている。当該研修では、コーチングスキルの向上(第1部)と効果測定の基礎知識の習得(第2部)を目的としていた。本質問紙調査は、リーダー研修の参加者が普段指導者として携わっている健康増進プログラムの運営、参加状況、参加住民への効果等に関して、主観的に評定する形式で行われた。

質問紙の表紙には匿名性の保証、任意の参加、研究目的のみのデータ使用が明記され、また同じ内容についてのアナウンスも行われた。回答者の性別は男性(13

名)、女性(23名)、不明(3名)であり、50～59歳(1名)、60～69歳(19名)、70歳以上(17名)、不明(2名)という年齢層の内訳であった。データ収集は、リーダー研修後に行われた。

2 ロジックモデルの測定指標

本研究における測定指標を作成するにあたっては、ロジックモデルを構成する各要因を項目サンプリングの規準とした(例:安田, 2011, pp.105-113)。ロジックモデルの要因の1つに、活動のレベルを超えた副次的・派生的な影響と定義されるインパクトがある。しかし、インパクトの範囲や認知は、通常、都道府県・自治体レベルといったより広域な範囲に及ぶため、活動自体の状況や効果の査定・評価とは対象が異なってくる(例:コミュニティ活性化、“健康資本”の強化、医療費・社会保障費の抑制)。したがって、本研究ではこのインパクトに関する指標は作成せず、インプット、アクティビティ、アウトプット、アウトカムの4指標に絞った(付録1参照)。

各指標は次の通りであり、回答者は各指標を構成する項目に対し「そう思わない」から「そう思う」までの4件法での評定を求められた。

1. インプット指標

本調査におけるインプットは、①人的資源(例:「毎回の地域での活動を支えるために十分な人材(会員)がいる」)、②実施場所(例:「活動場所のスペースや施設等が確保されている」)、③運営資金(例:「活動するにあたって運営費に特に困ることはない」)、④地域とのネットワーク(例:「地域や自治体と連携が取れている」)などに関する計7項目の指標によって査定された。

2. アクティビティ指標

アクティビティは、地域への啓発・アウトリーチ活動や実際の健康増進活動(例:体操を通じた健康づくり)のことを指す。アクティビティの測定に関しては、活動方針の尊重や計画と実施との齟齬はもとより、問題・課題への対処や解決方策(trouble shooting)そして組織開発(organizational development)の状況など、活動の導入から展開までが対象となる(例:Chen, 2005)。よって、①活動方針(例:「活動方針が明確である」)、②活動への工夫や問題対処(例:「地

表1 ロジックモデル (LM) の各指標の平均値, 標準偏差, 項目数, 信頼性係数

LM 要因	Mean	S.D.	項目数	Cronbach's α
インプット	2.60	.56	7	.73
アクティビティ	3.02	.43	7	.77
アウトプット	2.65	.53	5	.77
アウトカム	2.79	.51	5	.75

表2 各測定指標の相関係数表

	インプット	アクティビティ	アウトプット	アウトカム
インプット	1.0			
アクティビティ	.59**	1.0		
アウトプット	.42*	.68**	1.0	
アウトカム	.65**	.74**	.50**	1.0

** $p < .01$, * $p < .05$

域の人々に喜んでもらえるよう, 工夫した活動が行われている)], ③組織マネジメント (例:「全般的にみて, 会の決まりやルールは守られている」) に関する計7項目をアクティビティ指標とした。

3. アウトプット指標

本調査におけるアウトプット指標は, ①参加状況 (例:「活動への住民の参加率は高いと言える」) および②活動の維持・継続 (例:「活動への参加状況からみて, 今後の活動の維持・継続に問題がない」) についての質問項目から構成された。また, 後述のアウトカム (効果) がアウトプット (結果) の中身である“効き目”の有無や多寡によって判断されるのに対して, アウトプットでは, 活動への参加や活動の維持・継続といった“出力”の効率性も問われることになる (Martin, & Kettner, 2010)。そこで, 本指標に③効率性に関する項目 (例:「全体的にみて, 会の運営は効率性であると言える」) も加えた上で, 合計で5項目のアウトプット指標による測定が行われた。

4. アウトカム指標

最後に, 実施者の視点から捉えた, ①参加者への効果 (例:「参加者に目に見える効果 (例:健康増進) が出ている」) および②コミュニティにおける成果 (例:「会の活動は, 地域で多くのことを成し遂げている」) に関する計5項目をアウトカム指標とした。

III 結果

1 記述統計

ロジックモデルの各指標の記述統計量を表1に示し

た。アクティビティ指標 ($M = 3.02$; $SD = .43$) の平均値が, 他の指標に比べて高い結果となっていた。活動内容や方法に関しては, 平均的にみると“ややそう思う” (3) という認識がリーダー間でなされていたことになる。

その他の指標に関しては, アウトカム ($M = 2.79$; $SD = .51$) > アウトプット ($M = 2.65$; $SD = .53$) > インプット ($M = 2.60$; $SD = .56$) の順に平均値が高く, それぞれが“ややそう思う” (3) と“あまりそう思わない” (2) の間で推移していた。

2 各指標の信頼性

ロジックモデルの各指標の信頼性を推定するために Cronbach's alpha 係数を算出したところ, インプット (.73), アクティビティ (.77), アウトプット (.77), アウトカム (.75) という結果となった。したがって, すべての指標において全分散のうち70%以上が真値を反映していたことが明らかになった。

3 相関係数

次に, 指標間の相関係数を算出し, 表2に示した。それぞれの指標の相関をみると, アクティビティとアウトカムが非常に高く ($r = .74$; $p < .01$), またアクティビティとアウトプット ($r = .68$; $p < .01$) およびインプットとアウトカム ($r = .65$; $p < .01$) も同様に高い値を示していた。

一方で, アウトプットとアウトカムに関しては中程度の相関 ($r = .50$; $p < .01$), インプットとアウトプットに関してはそれより若干低めの相関 ($r = .42$; $p < .05$) を示す結果となっていた (表2参照)。

表3 アウトカム指標の規定因：階層的回帰分析

LM 要因	model 1				model 2				model 3			
	<i>B</i>	<i>SE B</i>	β	<i>pr</i>	<i>B</i>	<i>SE B</i>	β	<i>pr</i>	<i>B</i>	<i>SE B</i>	β	<i>pr</i>
インプット	.45	.11	.66**	.66	.24	.12	.35 †	.42	.24	.12	.35 †	.42
アクティビティ	—	—	—	—	.44	.14	.53**	.57	.45	.18	.53*	.50
アウトプット	—	—	—	—	—	—	—	—	-.01	.18	-.01	-.01
<i>R</i> ²	.44				.62				.62			

pr = partial *r* (編相関係数) ; ** *p* < .01, * *p* < .05, † *p* = .05 ; LM : ロジックモデル

4 アウトカム (成果) の規定因

本研究では、介入活動の実施者（リーダー）の判断によるアウトカムの状況のアセスメントをアウトカム指標と称したが、ここではそのアウトカム指標が、他の要因によってどのように規定されるかを、階層的重回帰分析によって検討した（表3参照）。

まず、インプット指標を投入したところ（model 1）、アウトカム指標との有意性が確認された（ $\beta = .66, p < .01; pr = .66$ ）。次に、アクティビティ指標（model 2）、アクティビティ指標およびアウトプット指標（model 3）を追加投入した結果、インプット指標（ $\beta = .35, p = .05; pr = .42$ ）およびアクティビティ指標（ $\beta = .53, p < .05; pr = .50$ ）との有意な関連が確認された（model 3）。その一方で、アウトプット指標はアウトカム指標の有意な規定因とはなっていないかった。モデル（model 3）の説明率は62%であった。

5 測定指標の一般化可能性の分析

本研究におけるロジックモデルの各指標の項目数は、心理学における定量的研究の慣例に従い、回答者の負担への配慮や内容の妥当性（content validity）を考慮しつつ、任意に決定された。そのため、項目数に関する根拠、つまり“各指標に何項目必要か”という問いに対してデータに基づいた判断は行われていない。そこで最後に、一般化可能性係数（generalizability coefficient）を算出し、仮に項目数を変化させた場合の信頼性の変化に関する分析を行った。一般化可能性係数の算出にあたっては GENOVA プログラム（Crick & Brennan, 1983）を使用し、その結果をプロットしたものが図2である。

項目数と一般化可能性係数の推移をみると、アウトプット指標とアウトカム指標に関しては、インプット指標やアクティビティ指標と比較して、同一項目数に対してより高い信頼性が期待できることが示された。

つまり、介入以後の状況を示すアウトプット指標とアウトカム指標の項目数は、介入以前・介入中の状況を示すインプット指標およびアクティビティ指標と比較すると、より少ない項目数でのアセスメントが可能となることが明らかになった。

具体的には、80%の信頼性（G-coefficient = 0.8）を担保するために必要な項目数は、インプット指標については10項目程度、アクティビティ指標については8項目程度、アウトプット指標については5項目程度、アウトカム指標については6項目程度となっていた。また90%の信頼性（G-coefficient = 0.9）を得るためには、インプット指標については20項目以上、アクティビティ、アウトプット、アウトカムの各指標については、15項目程度が必要という結果となっていた（図2参照）。

IV 考察

本研究は、コミュニティ介入の構造化の方法を検討することが目的であった。そのために、ロジックモデルの各要因を規準とした測定指標を作成し、健康増進を目的としたコミュニティ介入の実施者（リーダー）から収集した調査データの分析を行った。

ロジックモデルの各測定指標の信頼性については、おおむね70%以上の信頼性を示していた（Cronbach's alpha = .73-.77）。したがって、ロジックモデルを規準とした測定指標には一定の信頼性が認められたことになる。ロジックモデルは、コミュニティ介入を含むさまざまな形態の介入活動の可視化に用いられることが多いものの、各要因・概念を項目サンプリングの規準とした測定指標を作成し、測定を試みるという本アプローチの有効性も確認できた。

また相関分析の結果、測定指標間の相関は全体的に高く、特にアクティビティに関しては、アウトプットおよびアウトカムとの強い関連性があることが明らか

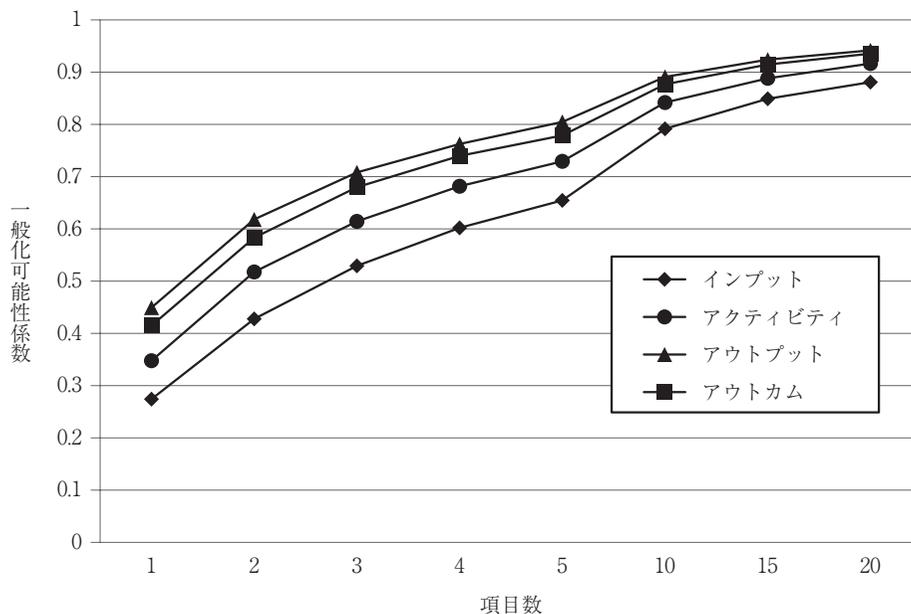


図2 一般化可能性係数と測定指標の項目数の推移

になった。ロジックモデルは、その理論的構造がインプット→アクティビティ→アウトプット→アウトカムという因果関係の連鎖によって生じるものと仮定できる（例：W.K. Kellogg Foundation, 2004）。もしこの仮定が正しいとすれば、近接要因（例：インプットとアクティビティ）の相関が遠隔要因（例：インプットとアウトカム）の相関よりも高くなるという関係性が理論上、成立する（例：時系列データの自己回帰モデルの相関パターン）。しかし、今回のデータからはそのようなパターンは確認されず、ロジックモデルの連鎖構造に沿った解釈は成立しなかった。

本研究では、リーダーの評定によるアウトカム指標の規定因に関する分析も行った。コミュニティ介入の実施に際しては、受益者である地域住民をはじめ、介入の実施者（リーダー）、介入のマネジメントを行う管理・運営者、介入を多面的に支援する自治体など、さまざまなステークホルダーが存在する。これらのステークホルダーの関心は、“何が介入の効果・成果（アウトカム）を高めるのか”に向くことが多い。

本結果からは、介入のアウトカムを高める要因は、インプットおよびアクティビティのみであり、アウトプットに関しては、統計的有意性および効果量の大きさから判断しても、アウトカムを高める要因とはなり得なかったことが明らかになった。したがって、コミュ

ニティ介入をより効果的なものにするためには、さまざまなインプット資源（例：活動を支える人材、活動スペースの確保、地域との連携、情報の周知）をより充実させると共に、活動（アクティビティ）の内容や方法の質（例：明確な方針、工夫した活動、問題への対処、ルールの遵守）を高めることが有効であることになる。

さらに、活動への参加率や効率性および活動の維持・継続に関しては（アウトプット）、介入活動のアウトカムそのものには関連しないことも明らかになった。自治体や行政における政策・施策の評価にロジックモデルの発想が援用される際には、アウトプット指標によって、政策・施策の効果（有効性）が評価されることが多い。つまり、公共施設やサービスの利用率などのアウトプットの情報に基づき、介入活動の“良し悪し”や“効き目”が判断されることが多い。

しかし本来、“介入効果はあったのか”という問いには、アウトカム指標の結果による判断が妥当となる。本結果から、アウトプット指標とアウトカム指標との関連性が見出されなかったことを踏まえると、アウトプット指標による価値判断・意思決定は不十分あるいは不正確であるということになる。つまりこれは、介入活動や提供されたサービスの量や質の向上そのものが、利用者の利益や肯定的変化に直接的につながると

は限らないことを意味している。

本研究で用いたロジックモデルを規準とした測定指標は、本データに基づき限定的に解釈されるべきものであり、その他の用途には適していない。しかし、ロジックモデルの各要因を構成概念とした指標を作成することにより、さまざまなコミュニティ介入が一定の信頼性のもとに査定できることが明らかになった。このように、ロジックモデルをクライテリア（規準）とするアプローチが用いられれば、複雑な構成によるコミュニティ介入であったとしても、体系的かつ効率的な構造化が可能となる。

今後は、方法論としての本アプローチの精緻化を進めるとともに、他の同様なコミュニティ介入にも応用可能な構造化のガイドライン等の作成が有用であると考えられる。その際に、測定指標の一般可能性に関する分析結果が参考になる。今回と同様の変動要因（例：参加者数、参加者の属性、介入の目的や内容、実施文脈）を持つ介入活動に関する測定を、80%の信頼性に基づいて実施するために必要となる指標数の概算は、本結果より、インプット（10項目）、アクティビティ（8項目）、アウトプット（5項目）、アウトカム（6項目）と言える。

また、90%という高い信頼性の基準を得るための指標数の概算は、インプット（20項目以上）、アクティビティ（15項目）、アウトプット（15項目）、アウトカム（15項目）となっていた。以上を参考に今後の研究では、回答者への負担を考慮しつつも、データに基づいた指標作成に向けた検討がなされるべきである。同時に、信頼性の高い測定結果を現場（フィールド）に還元し、介入の実施者・実施主体のエンパワメントにつながる働きかけも重要な課題であると言える。

本研究の限界点として、サンプル数の少なさ（ $N = 39$ ）が挙げられる。健康増進活動の実施者の母数は、年ごとに若干の変動があるものの約50名（ $N = 50$ ）であることを考慮すると、大幅なサンプル増は期待できない。しかし方法論の妥当性の検討には、より大きなデータセットによる分析が適していると考えられる。以上の限界点を踏まえた上で、本分析結果を解釈することが重要であると言える。

またロジックモデルの測定指標の妥当性に関しては明らかにされてない部分が多い。例えば、ロジックモデルの要因間の相関は比較的高い数値を示していたが（ $r = .42-.74$ ）、これらは本来存在する相関のほか、

各回答者の測定指標（項目）への回答傾向が似ていたことから生じた可能性も否定できない。つまり、同じ人に同じような項目で質問すれば自然に相関が高くなる、という可能性である。このような点を鑑み、今後の研究では、因子分析等による構成概念の妥当性の検討および更なる測定指標の開発が必要と言える。

さらに、本研究で用いた測定指標はすべて実施者側の視点、つまり地域リーダーによって評定されたものである。このような自己評価データには“介入の結果をよく見せたい”あるいは“成果が出ていると思いたい”といった評定者のバイアスが混在することも十分考えられる。本研究では、インプット、アクティビティ、アウトプット、アウトカムというロジックモデルの要因を規準としてコミュニティ介入が構造化されたが、評定者のバイアスは、特にアウトプット指標やアウトカム指標に現れる可能性が高い。本研究は、主にプログラムの改善や質向上のための自己評価・フィードバックを目的としたアセスメントを想定したものである。しかし、本アプローチがプログラムの出来不出来（成果）を問うアカウンタビリティを目的としたアセスメントに用いられた場合、そのバイアスが特に増すことが予想される。今後は、プログラムの実施者・運営者といったステークホルダーの自己評価データに関するバイアスや妥当性の問題を、データの活用目的（例：介入の改善・質向上やアカウンタビリティ）と照らし合わせて検討することが重要と言えよう。

最後に、本データから算出された相関係数は本来、因果関係の直接的な予測には用いられず、ロジックモデルの要因間の因果関係に関する解釈は可能ではない（必要十分でない）。つまり、ロジックモデルの要因間の関係性を精査するために、例えば、事前データ（インプット指標）、モニタリングデータ（アクティビティ指標）、事後データ（アウトプット指標・アウトカム指標）を収集し、時系列に沿ったモデルの因果関係を特定するための実験デザインを用いていない。したがって、要因間の正確な因果関係は特定されていない。今後の展開として、以上のような時系列に沿った実験デザインを応用したロジックモデルの妥当性の検討は、コミュニティ介入の実証研究の更なる発展につながると思われる。

▶ 文献

Bloom, B.L. (1980). Social and community interventions.

- Annual Review of Psychology*, 31, 111-142.
- Chen, H.T. (2005). *Practical program evaluation : Assessing and improving planning, implementation, and effectiveness*. Thousand Oaks : Sage.
- Cohen, E. (1973). Social and community interventions. *Annual Review of Psychology*, 24, 423-472.
- Cramer, M.E., Atwood, J.R., & Stoner, J.A. (2006a). A conceptual model for understanding effective coalitions involved in health promotion programing. *Public Health Nursing*, 23, 67-73.
- Cramer, M.E., Atwood, J.R., & Stoner, J.A. (2006b). Measuring community coalition effectiveness using the ICE[®] instrument. *Public Health Nursing*, 23, 74-87.
- Crick, J.E., & Brennan, R.L. (1983). *Manual for GENOVA : A generalized analysis of variance system (American College Testing Technical Bulletin No. 43)*. Iowa City, IA : American College Testing.
- Gesten, E.L., & Jason, L.A. (1987). Social and community interventions. *Annual Review of Psychology*, 38, 427-460.
- Granner, M.L., & Sharpe, P.A. (2004). Evaluating community coalition characteristics and functioning : A summary of measurement tools. *Health Education Research : Theory & Practice*, 19, 514-532.
- 本間隆之 (2012). MSMにおける HIV 感染の行動科学調査および介入評価研究 —ロジックモデルを用いた CBO による HIV 啓発活動のプロセス評価— 厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業『MSM の HIV 感染対策の企画, 実施, 評価の体制整備に関する研究』報告書 〈http://www.msm-japan.com/gallery/wp-content/uploads/2012/08/H23-MSM_Homma.pdf〉 (2014 年 3 月 26 日)
- Hughey, J., Peterson, N.A., Lowe, J.B., & Opreescu, F. (2008). Empowerment and sense of community : Clarifying their relationship in community organizations. *Health Education & Behavior*, 35, 651-663.
- Hughey, J., Speer, P.W., & Peterson, N.A. (1999). Sense of community in community organizations : Structure and evidence of validity. *Journal of Community Psychology*, 27, 97-113.
- 池田 央 (1994). 現代テスト理論 朝倉書店
- Iscove, I., & Harris, L.C. (1984). Social and community intervention. *Annual Review of Psychology*, 35, 333-360.
- Mancini, J.A., & Marek, L.I. (2004). Sustaining community-based programs for families : Conceptualization and measurement. *Family Relations*, 53, 339-347.
- McKinsey & Company for Venture Philanthropy Partners (2001). *Effective Capacity Building in Nonprofit Organizations*. 〈<http://www.vppartners.org/sites/default/files/reports/assessment.pdf>〉 (2014 年 3 月 26 日)
- Renger, R. (2002). A three-step approach to teaching logic models. *American Journal of Evaluation*, 23, 493-503.
- Reppucci, N.D., Woolard, J.L., & Fried, C.S. (1999). Social, community, and preventive interventions. *Annual Review of Psychology*, 50, 387-418.
- 佐藤哲郎 (2010). 社会福祉協議会活動の評価方法についての一考察 —プログラム評価におけるロジック・モデルの活用— 社会福祉学研究紀要, 14, 45-51.
- Speer, P.W., & Hughey, J. (1995). Community organizing : An ecological route to empowerment and power. *American Journal of Community Psychology*, 23, 729-748.
- W.K. Kellogg Foundation (2006). Using logic models to bring together planning, evaluation, & action: Logic model development guide. 〈<http://www.wkkf.org/resource-directory/resource/2006/02/wk-kellogg-foundation-logic-model-development-guide>〉 (2014 年 3 月 26 日)
- 安田節之 (2011). ワードマップ プログラム評価 新曜社
- 安田節之 (2013). プログラム評価研究 —臨床心理サービスのアカウントビリティ向上に役立つ視点— 臨床心理学, 13 (3), 337-342.
- 安田節之 (2014). コミュニティ介入の効果を高める組織特性の検討 —臨床心理地域援助における評価研究の試みとして— 臨床心理学, 14 (3), 402-411.
- Yasuda, T., Hughey, J., Peterson, N.A., Saito, Y., & Kubo, N. (2007a). Psychological sense of community and community organization : A cross-cultural study. Paper presented at the 11th Biennial Conference of the Society for Community Research & Action, Pasadena, CA.
- Yasuda, T., Hughey, J., Peterson, N.A., Saito, Y., & Kubo, N. (2007b). Exploring community organizing sense of community in Japan. Paper presented at the 115th Annual Convention of the American Psychological Association, San Francisco, CA.
- 安田節之・武田信子 (2010). 地域コミュニティ領域の実践におけるプログラム評価 コミュニティ心理学研究, 14 (1), 43-51.
- 安田節之・渡辺直登 (2008). プログラム評価研究の方法 下山晴彦 (編) 臨床心理学研究法 7 新曜社.

▶ 付録 1 各測定指標の項目

インプット指標

- 毎回の地域での活動を支えるために十分な人材 (会員) がいる。
- 会員は研修に参加するなどして, 自身のスキルアップに努めている。
- 活動場所のスペースや施設等が確保されている。
- 活動するにあたって運営費に特に困ることはない。
- 地域や自治体 (例: ○○市) と連携がとれている。
- 会の存在や活動情報が, 地域の人々に行き届いている。

地域の風土やニーズに沿った活動が展開できている。

アクティビティ指標

活動方針が明確である。

活動方針に沿った運営がなされている。

計画どおりに活動が行われていると言える。

地域の人々に喜んでもらえるよう、工夫した活動が行われている。

活動に問題点があった時には、うまく対処できている。

全般的にみて、会の決まりやルールは守られている。

会の運営には、各会員の意見が反映されている。

アウトプット指標

活動への住民の参加率は高いと言える。

活動への参加者は、リピーターが多い。

活動への参加状況からみて、今後の活動の維持・継続に問題がない。

会が「こんな人に参加して欲しい」と願う地域住民が参加してくれる。

全体的にみて、会の運営は効率的であると言える。

アウトカム指標

会への参加者に目に見える効果（例：健康増進）が出ている。

参加者同士の交流が増えている。

参加者のなかから、リーダーとなる人が出ている。

会の活動は、地域住民の健康維持に一役買っている。

会の活動は、地域で多くのことを成し遂げている。

An Assessment of Community Intervention Based on the Component Indicators of the Logic Model : Evidence Based on the Leaders' Evaluation of Intervention Processes

Tomoyuki Yasuda*

* Bunri University of Hospitality

Theory and practice of community intervention introduced innovative ideas and approaches to the field of clinical/community psychology. Nevertheless, practitioners often find difficulties in identifying the intervention theory along with the methods of delivering services due mainly to the complicated processes and outcomes associated with the intervention. The purpose of the present study was to assess a model of community intervention based on the component indicators of the logic model. Toward this end, a series of indicators was developed and tested by the data collected from the program managers "N=39" who played a leading role in delivering a health promotion program in suburban area. Results supported the appropriateness of this method, such that a total of four indicators showed the adequate levels of reliability. Furthermore, results based on the Generalizability Theory analysis suggested that a total of 5 to 10 items to each indicator can effectively be employed in order for the measurement of community intervention to be generalizable to other settings.

Keywords : community intervention, logic model, generalizability theory, program evaluation